Learning Support Center 広島修道大学 学習支援センター

LSC NEWS LETTER 2026 No.43

広島修道大学
Hiroshima Shudo University

Contents

第 4 期の認証評価を受けてーそして「新たな評価」制度に向けてー … 1　学習支援センターの 20 年 ～設置から現在まで～ … 2
第 82 回 LSC ドキュメンタリー・アワー開催報告 … 4　大学教育学会 第 48 回大会 参加報告 … 5　新任学習アドバイザー 挨拶 & LSC 資料紹介… 6
<学び★サプリ>学びを「奪う」?生成 AI・編集後記… 8

第4期の認証評価を受けて ―― そして「新たな評価」制度に向けて ――



○ 学習支援センター長
松川 太一

（公財）大学基準協会による第 4 期の認証評価の結果、本学は大学基準に適合していると2026年 3 月31日に認定公表された（認定期間は2026年度から2033年度まで）。この認証評価の受審にあたり、学習支援センター（以下、LSC）として点検・評価報告書の作成や実地調査の対応等を行ったことは、LSC の現状をふりかえる良い機会となった。公表された『広島修道大学に対する大学評価（認証評価）結果』において、LSC について言及があるのは「Ⅲ 概評」の「3 教育研究組織」、「6 教員・教員組織」、「7 学生支援」の各節であった。各節では大学全体としての評価が行われており、LSC に限定した評価結果という訳ではないが、いずれの節においても達成状況は【評定：A】であった。

認証評価において、LSC のどのような点が評価され、どのような点に改善が求められたのか。第一の評価点は、専任の学習アドバイザーを配置し、学生が個人やグループで学習できる「まなびコモンズ」での個別相談、学生向けワークショップの開催、自主的なグループ学習「スタディ・グループ」のサポートなど、多角的な支援が行われている点。第二の評価点は、本学では2024年度から TA・SA 制度を開始したが、指導補助者である TA・SA に対してハラスメント防止や個人情報保護に関する研修プログラムを適切に実施している点。第三の評価点は、成績不振学生への対応において各学部・学科の面談との重複を解消するために2025年度からは入学直後の早期アプローチに注力するなど、部局課題の点検・評価にもとづいた業務の見直しを行っている点である。

他方で改善が求められたのは、現在の LSC の取り組みは学生の自発性に依るところが大きく、利用促進策を強化することが期待される点である。近年、英語関連の学習相談の利用者数が増加しているが、留学を目標にしているなど利用者の学習への動機づけは比較的高い。しかし学習への動機づけが高くない学生の場合、たとえ基礎学力の不足を感じていても自発的に LSC へ来て学習相談を受けることはほとんどない。必ずしも学習への動機づけが高いとは言えない学生に対して、どのようにアプローチするかが課題である。

この課題を解決するには学習支援が必要な学生を早い段階で把握しなければならず、そのためには学部との連携が重要である。先述の入学直後の早期アプローチは LSC が担当する入学準備学習のデータを活用した学習支援の取り組みだが、その後も継続して学習支援が必要な学生へアプローチするには学部との連携が不可欠となる。それに加えて、これまでの認証評価制度に代わり2030年度（予定）から「新たな評価」制度が導入されると、学部と連携する必要性はさらに高まるだろう。なぜなら、文部科学省によれば「新たな評価」制度では、これまでの「大学全体の評価」だけでなく「学部単位の評価」も求められるからである。「学部単位の評価」には学修成果の達成状況に関する評価が含まれていることから、今まで以上に学部のディプロマ・ポリシーに沿った学習支援やその支援の効果に関する客観的なエビデンスのニーズが高まることが予想される。さらに学部教育の質向上という点では、FD などの教員に対する教育支援のニーズも高まることが予想される。第 4 期認証評価を受けての改善としてだけでなく「新たな評価」に向けても、これまで以上に学部と密接に連携することが LSC に求められている。

学習支援センターの20年

～設置から現在まで～

学習支援センター　安田 幸子

2005年９月に設置された学習支援センター（以下、LSC）は、２号館２階の一室からスタートし、2014年に協創館（８号館）に移転、現在に至ります。学びの空間は変化しましたが、学生の学習支援を中心とした活動は、スタート時の精神を持ち続けて20年が経ちました。

LSC 所属のスタッフも年々入れ替わり、学習アドバイザーが担当する業務や分野も少しずつ変化を続けながらこの20年間でどれほどの学生たちと関わってきたことでしょうか。設置年度である2005年度の『広島修道大学白書』（現在の『広島修道大学の現況』）を紐解くと、設置に至る経緯や思いが詳細に記されており、立ち上げ期のセンターの様子が思い浮かぶようです。大小の変遷を繰り返しながら活動してきた LSC の20年間を、主要な業務である学習相談と入学準備学習プログラムに焦点を当て、**数字**を交えて振り返ってみました。

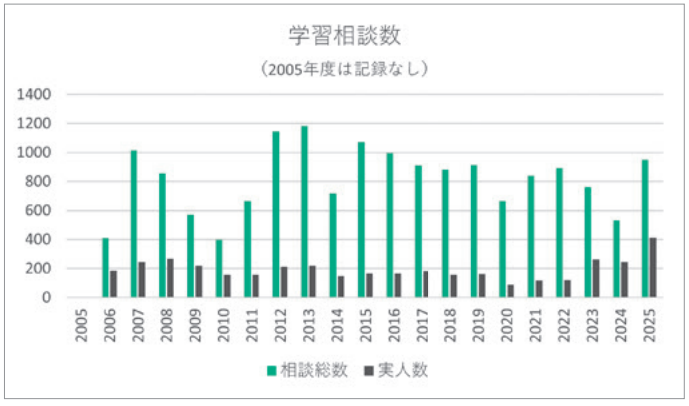
学習相談

LSC 業務の真髄とも言える学習相談。設置当初から「学生一人ひとりの学びをサポート」をモットーに、コロナ禍においても遠隔で学習相談を継続し、その時々の学習アドバイザーが様々な学生の様々な学習支援に携わってきました。**相談の延べ件数は16,381件**、**相談者の実人数は3,891名**。何度も相談に来てくれる学生もいれば、１回きりの相談で完結する学生もいますが、相談する場所として LSC を選んでくれることは LSC スタッフの喜びであり励みとなっています。

この20年間で最も多い相談は、**英語**に関する相談で**7,300件強**と学習相談全体の半数近くを占めています。この傾向は設置当初から現在まで変わらず、近年では TOEIC® 等の資格取得に向けた学習がますます増加しています。英語に次いで多いのが**レポートの書き方・文章の書き方**に関する相談で、**3,800件強**と全体の約四分の一を占めています。先生方から伺う話や学生の提出物等から、レポートや文章に関する相談はもっと多くてもいいと感じるのですが、この数年の相談数は逆に毎年減少しています。生成 AI の利用が当たり前になりつつある中、学生が自ら直接相談に行こうと思える何かを LSC では探り続けています。

数学の学習相談は、数学担当の学習アドバイザーが在籍していた2013年度までで終了していますが、多い年は年間で**320件**あったと記録されています。現在では SA 制度を利用し、数学の得意な学生が相談に来る学生をサポートしてくれています。

そのほかの相談では、ノートの取り方、定期試験、プレゼンテーション、時間管理、等々多岐にわたる相談が持ち込まれています。





〈２号館時代の学習支援センター〉

入学準備学習プログラム

いわゆる早期入試合格者を対象とする「入学準備学習プログラム」は、入学センターが担当していたものをLSC が引き継ぎ、2005年度の設置当初から実施してきました。**対象となった新入生**は**延べ13,315名**。毎年高い参加率を維持しています。現在のプログラムは、学内で各学部・学科がそれぞれのプログラムを実施する 2 回のキャンパス学習と、LSC 作成のワークブックを用いる通信・課題学習という 2 つの形態で実施しています。

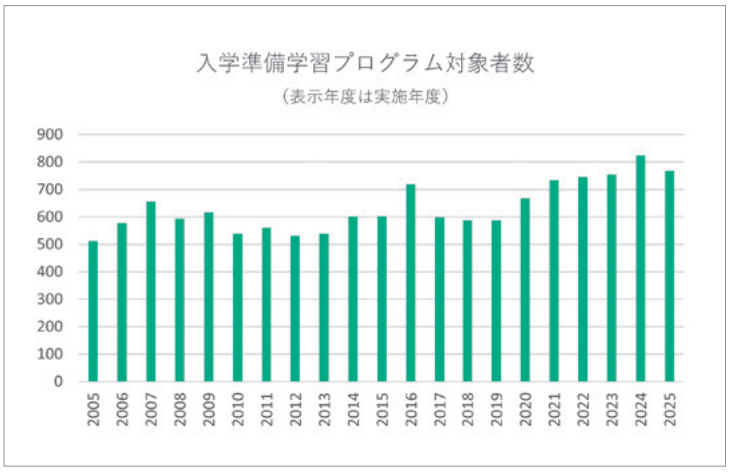
開始当初はキャンパス学習を 3 回実施していたこともありましたが、早々に 2 回の実施になり現在まで続いています。第 1 回目の開催から、午前中に開始し 1 日 3 つのプログラムを実施していましたが、新型コロナウイルスの影響により2020年度・2021年度はやむを得ず「Web キャンパス学習」として開催しました。2022年度には対面実施が可能になりましたが、同時双方向やオンデマンドでの実施を選択する学部もありました。2023年度実施からやっと、全学的に対面で実施するキャンパス学習が戻ってきたのですが、この年からプログラム数を減らし午後からスタートするキャンパス学習に変化しました。

コロナ禍前の2019年度までは、午前中スタートのため遠方から来る高校生には宿泊場所として学内のセミナーハウスを提供していましたので、1 泊 2 日のキャンパス学習となる参加者がいました。私たち LSC 職員も一緒に宿泊し、翌日（キャンパス学習当日）の朝食は、学内の食堂に協力していただいたり、外部から調達したりしながら、宿泊者一同で食べたものです。当時の昼食は参加者全員が複数の食堂に分かれ、先生方や先輩アシスタントも交えての賑やかな大昼食会となっていました。



〈2009年度実施のキャンパス学習昼食光景〉

入学準備学習プログラムではアシスタントとして活動する各学科の先輩学生も多く存在し、これまで**約1,000名の学生**が携わってくれました。先輩アシスタントの影響で前年度にプログラムを受けた 2 年生が志願してくれることもまれではなく、この学生同士の響き合いがこの先も継続してほしいと感じます。



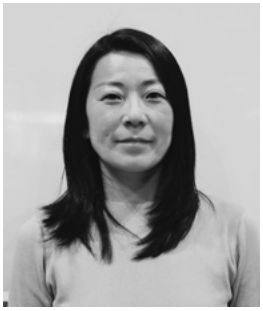
※学習相談、入学準備学習プログラムに関する数字（入学準備学習アシスタント数を除く）は、2005年度から2025年度までの『広島修道大学白書』『広島修道大学の現況』より抜粋しました。

第82回 LSCドキュメンタリー・アワー開催報告

LSCドキュメンタリー・アワーとは、本学の教員が自ら選んだドキュメンタリー映像を、教員の解説と共に視聴する企画です。取り上げたテーマに対する独自のアプローチに触れられる機会になっています。

「国際協力を問い直す～「私たち」と「あの人たち」の境界線を越える～」

国際コミュニティ学部准教授　隅田 姿



今回のドキュメンタリー・アワーでは、国際協力をめぐる私たちの思考の前提を見直すことを目的としました。第二次世界大戦後、荒廃したヨーロッパや敗戦国を支えるために大規模な国際援助が行われました。こうした戦後復興支援が現在の国際協力の原型となり、その後、各国が政府開発援助（Official Development Assistance: ODA）として制度化していきました。「先進国が困っている国を助ける」という構図は、当時は必要なものでしたが、その思想は今もなお私たちの中に深く残っています。国際協力という言葉を聞くと、多くの人が「助ける側の私たち」と「助けられる側のあの人たち」という図を思い浮かべてしまうのは、この歴史的背景があるからです。しかし、この「私たち／あの人たち」という境界線こそが、国際協力を一方向の援助として固定化し、相手の主体性を奪う構造を生み出してきました。

この境界線を強く意識してしまう理由の一つに、幼い頃から触れてきたヒーロー文化があると思います。アンパンマン、ウルトラマン、プリキュアなど、困っている人を助けることが正義であり、当然の行いであるという価値観を、私たちは物心つく前から刷り込まれてきました。アンパンマンは毎日町中をパトロールし、お願いされていなくても困っている人を見つけて助けに向かいます。私たちはこうしたヒーローに自分を投影し、助けることに何の疑問も抱かず、当然のものとして行います。

しかし、ヒーローの行動は必ずしも相手の自立につながるわけではありません。ドラえもんの最終話（諸説ありますが）では、ドラえもんは「僕がいると、のび太くんはダメになっちゃうよ」と涙ながらに未来へ帰ります。半世紀近く、ドラえもんはのび太くんをひみつ道具で助け続けていましたが、それはのび太くんの成長を妨げてしまうことを、ついに気づいたのでしょう。のび太くんはその後どうなったでしょうか。ドラえもんの道具に頼ることなく、自分の力で努力し、成長し、しずかちゃんと幸せな家庭を築いたのではないかと、私は想像します。

では、どうすれば境界線を越えられるのでしょうか。その鍵は「あの人たち」を知ることです。遠く離れた国の人々を、抽象的な困っている人としてではなく、一人ひとりの生活や価値観、喜びや悩みを持つ存在として理解すること。そして、彼らの文化や歴史、日常の営みを詳しく知り、そこに自分との共通点を見つけていけば、私たちの中にあった境界線は自然と薄れていきます。さらには、彼らと友達になることで、「あの人たち」ではなく「私たち」となっていくのです。

この記事を書いている最中に熊本地震が発生しました。いち早く支援を表明した芸能人に対し、ネット上では賛否両論が巻き起こっています。東日本大震災以降、災害地には不要な物資が送り込まれたり、現場の受け入れ体制を無視した個人ボランティアが殺到したりして、災害地の人々が困惑する様子が報じられてきました。こうした困惑する人々の中には友人や親せきが含まれていたり、または次は自分がその立場になりうるという思いもあることから、この状況を「私たち」の問題として捉えることができています。それにより、受け取る側の立場に立って物事を考え、相手が何を求めているのかを見極めることができます。このように国内では支援のあり方への理解が少しずつ深まっています。しかし、国際協力となると、距離や時間的な隔たりがあるため現場の状況が見えにくく、同じような改善が進みにくいのが現状です。

今回のドキュメンタリー・アワーでは、私たちが無意識のうちに持っている境界線を見つめ直し、それを越えるための方法についてお話をしました。国際協力は、誰かを助ける行為（Assistance）ではなく、世界をともにつくるための協働（Cooperation）です。私たちが「あの人たち」を深く知り、共通点を見いだし、「私たち」となることが、これからの国際協力に求められる姿だと考えています。



大学教育学会 第48回大会 参加報告

学習支援センター　村田 翔

2026年６月６・７日に創価大学（東京都八王子市）で開催された大学教育学会第48回大会に参加した。１日目は、ラウンドテーブルや全体会、基調講演・シンポジウム・情報交換会が行われた。２日目は自由研究発表が行われた。２日間を通して、関心があるラウンドテーブルや発表に参加して知見を得たり、多くの参加者と名刺交換をしながら交流を深めたりすることができた。一方、各研究発表から得た知見を本学の状況に対して、どのようにアプローチすればよいのかを考えるきっかけとなった。

１日目のシンポジウム「多様性×学び×未来～大学教育のインクルーシブ・デザイン～」では、LGBTQ+ 当事者からの基調講演を踏まえて、大学教育におけるインクルーシブ･デザインについて議論がなされた。主な話題として、教学マネジメントに DEI（多様性、公正、包摂）の概念を取り入れることや、支援の対象を「学生の困難」だけではなく「学習環境の障壁（バリア）」を取り除く実践を組織的に行うこと、多様性に対応するためのファシリテーターの必要性があげられた。また、学生からの申し出による合理的配慮から、誰しもが配慮される全学的なインクルーシブ・デザインへのパラダイムシフトを各大学でしなければいけないという指摘があった。

今大会では、各ラウンドテーブルや自由研究発表において生成 AI に関する内容が多数みられた。制度的・倫理的側面からみた生成 AI に関しての使用方法や実際のライティング教育（レポート作成）の場面など様々な視点から検討した生成 AI の利点や課題等が提示されていた。実際に参加したラウンドテーブル「With, Without, and Beyond Generative AI―生成 AI 時代の大学ライティング教育・支援を展望する―」では、法学・哲学・教育学の各分野から話題提供が行われ、多様な観点で議論された。その中で、ライティングは生成 AI と親和性が高いことは間違いないが、書いた文章に対する最終的な責任は自分自身で持つことを学生に意識させるよう確実に伝えることが必要だという意見があった。本学でも使用に関する指針作りや教育・研究活動での活用例を適切に示す必要がある。

他にも、ラウンドテーブル「学生エンゲージメントを高めるピアサポート学生の経験とはどのようなものか」に参加し、ピア活動からエンゲージメントを高めるための取り組みやその成果をどう可視化するかという各大学からの報告があり、アンケートなどの量的調査や学生へのインタビューなどの質的調査から学生がいかに満足して活動できているのか、活動の課題はどういうものなのか明らかにしようとしている発表内容であった。確かにデータに基づく学生の成長を可視化することは必要ではあるが、データ分析ができる専門の教職員が継続的にいなければ十分な検証をすることができないと感じた。

自由研究発表では、TA・SA 等学生スタッフ育成に関する内容やライティング科目に関して発表を聴講した。例えば、成蹊大学の取り組みとしては、教員と SA が毎週授業前に打ち合わせの時間を設定し、お互いの取り組みを講評し合うことで実践共同体を作り出そうとしている実践発表であった。また、創価大学の新たな初年次科目としてライティングに関する内容を設定した発表では、全講義を通して個人作業とグループでの共有、自己の振り返りを繰り返し行う授業デザインが意識されていると話していた。これらの研究発表を通して考えたことを２点示す。1 点目は、それぞれの取り組みを進めるための専門的な教職員が配置されることが重要だと感じた。学生スタッフ育成やライティング科目について主体的に運営し、全体を統括できる人材がいたからこそ各取り組みが進められており、同様の制度を運用するには専門的な人材が継続して在職できることが不可欠だと考える。２点目は、仕組みづくりにあたって関係する教職員や学生への理解を丁寧に行っていた点である。いずれの取り組みも制度の説明やともに担当する教員への周知や共通理解を図りながら実践している様子が伺えた。この点については説明する側だけの問題ではなく、説明される側の教職員も制度を理解しようとする姿勢を示したり、協力する態度を見せたりすることが大切だと考える。

最後に、この２日間全国各地から非常に多数の大学教職員が参加しており、本学の専任教職員もこのような機会に積極的に参加し、大学教育に関する動向を学ぶべきであると強く感じた。

新任学習アドバイザー

挨拶＆LSC資料紹介

学習アドバイザー　泊里 卓哉



この４月に学習アドバイザーとして着任いたしました泊里卓哉と申します。英語の授業やTOEICのことなど、主に英語に関する学習相談をお受けしております。何か悩みや気がかりなことがあれば、協創館を訪れて気兼ねなく声をかけてください。

私は、大学卒業後に改めて英語教育について学び、中学校・高等学校で英語教員として勤務してきました。そのため、専門分野としては英語となりますが、もともと関心の幅は広く、言語だけでなく、社会の仕組みやその中での人の考え方や生き方にも関心を持っています。

「学ぶこと」についても、その意義は幅広く、授業や試験、資格取得のためだけに行う特別なものではないと私は考えています。新しい知識を得ることはもちろん、他者との会話で視野が広がること、初めて訪れた場所で世界観が変わること、友人との日々が後々まで記憶に残ることも、広い意味ではすべて学びの一部であるはずです。その意味で、皆さんの大学生活全体が、常に「学習」として向き合いながら形作っていく営みなのだと思います。

そのため、学習相談でも、いただいた質問に表面的に答えて終わるというより、必要に応じてその周辺のことまで含めてじっくりお話を伺いたいと考えています。目の前にある悩みは、その背後や周囲にある別の問題から派生していることが少なくありません。本人を本当に悩ませているものは何なのかを一緒に整理し、そのうえで、その時々の状況で無理なく進められることや、少し先につながる取り組み方を考えていきたいと思っています。英語のことはもちろん、「こんなことを相談してもよいのかな」と思うような疑問や懸念でも、気軽に話してみてください。新しい発見や思いがけない選択肢につながることがあるかもしれません。

大学生活は、その過ごし方によって、後に記憶として残ったときの「濃淡」が大きく変わります。数十年後に振り返ったときに「青春がいつだったのか思い出せない」といったことにならないよう、学習支援をはじめとする様々なサポートを活用し、広島修道大学での学びや経験を、将来の自分にとっての財産にしてもらえたらと思っています。

LSC資料紹介

認知心理学者が教える最適の学習法 ビジュアルガイドブック

ヤナ・ワインスタインほか著　山田 祐樹日本語版監修　岡崎 善弘訳／東京書籍（2022）



『おもひでぽろぽろ』というジブリ映画をご覧になったことがあるでしょうか。東京で働く主人公のタエ子は、休暇を取り、遠縁にあたる山形の農家を手伝いながら、10歳のころの様々な記憶を思い出します。時には懐かしみ、時には苛まれつつ、紅花を摘みながら、自分のこれまでを振り返るのです。

今回はこのノスタルジー溢れる名作アニメについてご紹介……というわけではなく、「思い出す」ことの学習における重要性を科学的根拠に基づいて示した『認知心理学者が教える最適の学習法 ビジュアルガイドブック』をご紹介します。

本書は、教育や学習に有効な手法を、具体例とともに実践につなげられるようまとめたものです。その一つが「検索練習」。この「検索」こそが、すなわち「思い出す」こと、「想い起こす」ことです。一般的にも、想起は反復・分散と並んで、効果的な記憶にとって重要とされますが、本書はその効果を実証研究とともに読者に説得的に伝えてくれています。

代表的な研究（p.203, 209; Roediger & Karpicke, 2006）では、大学生に文章を学習させ、繰り返し読む群と、読んだ内容を思い出す練習を行う群を比較しました。その後に記憶度を測るテストを行うと、５分後では前者が優っていましたが、２日後と１週間後では後者の方が維持される記憶は多く、前者の数値を上回っていました。ただ読み直しを繰り返すよりも、検索練習の方が長期的な記憶に有効であることを示す結果です。

さらに本書には、検索練習が記憶の長期化だけでなく、推論や応用といったより高次の思考にも効果をもつという興味深い記述があります（p.208）。個々の思い出し活動が、より抽象的な認知能力にまでつながるのだとしたら、なんとも奥深い神秘を感じます。

『おもひでぽろぽろ』のタエ子は、エンディングで自身にとって大きな決断をします。この決断を機に、作中絶えず寄り添っていた10歳のタエ子は、27歳のタエ子を見送ります。それまでの「おもひで」が、人生の転換期にあった彼女の決意を支えたのでしょう。一つ一つの断片的な記憶を想い起こすことで、人生という大局を捉えた意思決定を行うという高次の力を与えられたのかもしれません。

ただ勉学に耽って得る知識だけではなく、自分の人生を生きるための教訓を、こうした科学的な書籍を通しても学んでいきたいと思う今日この頃です。

学習アドバイザー　真部 大輔



2026年４月に学習支援センターの学習アドバイザー（英語担当）として着任いたしました真部大輔と申します。英語の勉強方法をはじめ、TOEIC・IELTSなどの資格試験対策や学習計画に関する相談を担当しています。

これまで、大学で英語教育や学習支援に携わり、英語学の研究にも取り組んできました。その一方で、私自身も一人の英語学習者であり、英語学習で苦労したことは少なくありません。留学や留学生との交流を通して、英語が通じる喜びを味わうと同時に、自分の力不足を感じることもありました。こうした経験は、英語学習に伴う不安や迷いに寄り添い、一人ひとりが自分なりの一歩を踏み出せるように支援したいという思いの原点の一つとなっています。

英語を学ぶ目的や動機、得意・不得意、学習に使える時間は、一人ひとり異なります。そのため、英語の学習法には、万人に共通する唯一の「正解」はないと考えています。学習相談では、まず「何をできるようになりたいか」「今、どこで困っているか」を丁寧に伺い、課題を整理したうえで、その人に合った、無理なく続けられる学習方法や計画を一緒に考えていきます。また、答えを一方的に示すだけではなく、学生自身が考え、自ら課題や改善方法に気づき、次の学習に生かせるよう支援することを大切にしています。相談をきっかけに、学生が自律的に学習を進められるようになることを目指します。

英語学習には、分かることやできることが増えていく楽しさがあります。一方で、一人で学んでいると、迷ったり、行き詰まったりすることもあります。そのようなときには、気軽に学習支援センターへ足を運んでいただければと思います。

英語は、試験のための科目であるだけでなく、人と人をつなぎ、新しい考え方や異文化に触れるためのコミュニケーションの手段です。皆さんにとって英語が、「勉強しなければならないもの」から「使ってみたいもの」へと少しずつ変わり、その学びを通して視野や可能性が広がっていくよう、お手伝いできれば幸いです。

LSC資料紹介

英語教師のための第二言語習得論入門［改訂版］

白井 恭弘著／大修館書店（2023）



「英語を長く学んできたのに、実際に話そうとすると、言葉がなかなか出てこない」。そのようなもどかしさを感じたことのある人は、少なくないでしょう。白井恭弘著『英語教師のための第二言語習得論入門［改訂版］』は、外国語がどのように身につくのかを探究する「第二言語習得論」の知見から、この根本的な問いに向き合う一冊です。

本書は、第二言語習得研究の基本を紹介したうえで、日本の英語教育の現状を捉え直し、小学校、中学校、高校、大学生・社会人へと段階を追って、効果的な指導と学習のあり方を論じています。英語についての知識を得ることと、その知識を実際の場面で使えることは、必ずしも同じではありません。理解できる英語に十分に触れることに加え、正確さと流暢さのバランスを意識しながら、自ら英語を使う経験を重ねることの重要性が、研究成果をもとに分かりやすく示されています。

本書で繰り返し示される「大量のインプットと少量・適量のアウトプット」という言葉は、本書の学習観をよく表しています。読む・聞くことを通して理解可能な英語を豊富に取り入れ、話す・書く機会も確保する。この両者を結びつけることが、知識を運用する力へと育てる鍵になります。私がこれまで関わってきた学生の中にも、語彙や文法の知識はあっても、話したり書いたりすることに難しさを感じる人が少なくありませんでした。その背景には、知識量だけでなく、英語を実際に使う経験の不足も関係しているのではないかと思います。そのような学生にとって、十分なインプットを土台としながら、話す・書く経験を少しずつ重ねることが、英語の運用能力を伸ばすための一つの手がかりになると思います。

本書の魅力は、個人の経験則や即効性をうたう学習法に頼るのではなく、研究の蓄積をよりどころに、英語の指導や学習を見直すための視点を与えてくれる点にあります。英語教育に携わる教職員にはもちろん、英語教師を目指す学生、英語の学び方に迷っている人、これまでの学習法を見直したい人にも薦めたい入門書です。

＜学び★サプリ＞

2026 Vol.30

学びを「奪う」？生成AI

学習支援センター次長　谷口 直隆

例年夏に行う教員採用試験の面接練習で、今年は、生成 AI の利用状況を尋ねました。すると、学生は「課題で使っている」と気まずそうに答えます。学生のみなさんは「AI の使用は良くないこと」と後ろめたさを感じているようです。実際に、この１年で提出された課題の中に酷似した内容や表現が見られることも少なくなく、評価方法の変更に悩むようになりました。

８月末に公表された次期学習指導要領の「審議まとめ（素案）」では、全ての教科に生成 AI の影響をふまえた記述がなされたことが注目を集めましたが、大学や社会においては、AI の活用はすでに「当たり前」の日常です。

ここで考えたいのは、その「使い方」です。「AI の安易な利用によって思考力・判断力・表現力が低下する」という懸念はよく見られる指摘です。このことについて、大学のレポートとは何か、その存在意義を考えてみます。

学生のみなさんにとってレポートは提出すべき「課題」でしょう。しかし、教える側にとっては、評価対象物であると同時に、授業での学びを整理・分析する重要な学習支援の「プロセス」です。学習者側がそこを AI に任せてしまっては、学習そのものが成立しません。

レポートにおける安易な AI 利用の問題は、考察や記述が本人のものではない点以上に、学習の機会そのものが失われる点にあります。よく「AI が奪う」と表現されますが、AI は（今のところ）主体的に「奪う」ということを行いません。AI を使う側が「学びを AI に差し出し、放棄してしまっている」というのが実情でしょう。

歌人の俵万智は、短歌の創作のようなクリエイティブなところを AI に任せることについて「もったいない」と述べていますが、短歌の創作と同じように、学びや気づきは、本来楽しいものです。その楽しさやそれを感じられる機会まで AI の使用で放棄してしまうことは「もったいない」ですし、そもそも、大学に進学した、学習の場に身を置く意味すらなくなってしまいます。

AI は使い方によっては、自身の学びを支援してくれる有用なパートナーとも言えるでしょう。だからこそ、それを使って行う行為が何のためのものなのか、失うものは何かをその都度考える姿勢が必要なのではないでしょうか。

編集後記

今回「学習支援センターの20年」の記事を書くにあたり20年前のデータまで遡りました。LSC が『広島修道大学白書』に最初に登場するのは設置年度の2005年度版で、設置に至る経緯と思いが記録されています。改めて LSC の存在意義を考える良い機会となりました。

LSC にまつわる数字という観点で見ていきましたので、本編には出てこなかったそのほかの数字について、少し記してみます。

座席数　LSC ではどのくらいの人数が学習できるでしょうか。**個人学習ゾーン**には**40席**、**グループ学習ゾーン**には**26席**（通常は可動式机が６セット）あります。多い日は全体で約60の席が全て埋まることもありますが、普段はどちらのゾーンも十分利用していただけます。毎日朝一から利用している学生もいるので、なかなかの快適空間なのだと思います。

本　LSC には誰でも手に取れる多くの本があるのはご存知でしょうか？**学生用**として**1,087冊**、**教職員用**として**835冊**の本があります。（2026年９月１日現在）学生用図書は図書館のように貸し出すことができませんが、小ぶりな学習空間に参考書があるのは学生にとっては使い勝手が良いように思います。英語関連、レポート・文章の書き方に関する本を中心に、学生の学習相談に必要な本、学生に手に取ってほしい本、など多数用意しています。そのほかにも、アカデミックスキル関連の本、数学や法律などこれまで学生や先生方から要望があった特定分野の図書資料、辞典・辞書まで幅広い分野の本があります。教職員用図書は、LSC 室内カウンター前の書棚に、初年次教育、授業設計、教授法、アクティブラーニング等、学習、授業、教育に関わる本を中心に集書しています。あまり知られていないかもしれませんが、教職員用は貸し出しができますので、LSC に一歩足を踏み入れて自由にご覧ください。

（学習支援センター　安田幸子）

Hiroshima Shudo University
LSC NEWS LETTER
Learning Support Center
広島修道大学 Hiroshima Shudo University
発行日　2026年10月31日
発行者　広島修道大学　学習支援センター
〒731-3195 広島市安佐南区大塚東1-1-1　TEL.(082)830-1426
E-mail gshien@js.shudo-u.ac.jp
◎LSC NEWS LETTER は大学公式WEBサイトでもご覧になれます。